



倒産方程式

こずかた治

徳間文庫



とうさんほうていしき
倒産方程式

© Osamu Kozukata 1995

1995年11月15日 初刷

著者 小沢 治おさむ

発行者 徳間 康快とくま やすよし

発行所 東京都港区東新橋一―二一〇五
株式会社 徳間書店

電話(〇三)三五七三・〇一一(大代)
振替 〇〇一四〇―〇―四四三九二

印刷 凸版印刷株式会社
製本

〈編集担当 本間 肇〉

ISBN4-19-890417-0 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

倒産方程式

こずかた治



徳間書店

目次

プロローグ

5

第一章 時の流れ

20

第二章 仏の手

51

第三章 一蓮托生

135

第四章 知恵比べ

173

第五章 落とし穴

225

第六章 恐い奴

261

あとがき

271

主な登場人物

森川 俊

会話から四十歳から四十五歳であろうと推察されているが本当の年を知る者はいない。背中に不動明王の彫り物を背負っているという噂うわさがあるが、作務衣さむえの下したの肌を見た男は誰もいない。大日円光仏教という教会の教祖で第二次世界大戦で亡くなった一般外人達の慰霊碑を建立しようと浄財集めをしている。季節によって変わるが着るものは作務衣だけである。

花房 晃

森川の腹心。司法試験に合格したがダイヤル式の金庫の鍵を開けることに病的な興味を持ち、そのため資格を剝奪された。

税所 一郎

金融業ビームファイナンスの社長。森川の金庫番。

矢 島

政治経済の新聞を発行している。

大 山

表向きは不動産業を営んでいる。

是枝省吾

南九州市に本拠を置く食品会社の社長。森川達に食いつぶされてしまう。

是枝昭重

省吾の弟で是枝食品の子会社、是枝商事の社長。

沼田晴樹

スーパ―沼田の経営者。是枝食品の倒産で莫大ばくだいな儲けもうをする。

プロローグ

人々が巷で^{ちまた}交わす話は暗い話題ばかりだった。

ドルの値打ちが幾ら下がっても、百円が限度だろうという大方の予想を容易く^{たやす}覆し、それからさらに十円近く下がって一ドルが九十円前後を行き来していた。

地球の警察、世界の大蔵省を自認し、アメリカがくしゃみをすれば日本が風邪を引き、世界中が熱をだすと言われるほど軍事力や経済力を世界に誇っていたアメリカのドルがたった九十円の値打ちしかないのである。

一ドル三百六十円の固定時代を知っている者には隔世の感がするのだった。株式も同じだった。

どんなに景気が悪くても、東京証券取引所の取引が三億枚を割るなどと予想した者はいなかった。それなのに、近頃ではせいぜい一億五千枚程度の取引量である。

日経平均株価もどうかすると、一万四千円台である。

鉄鋼を初め自動車、家電などの超大手企業の沈滞が続き何処^{どこ}へ行っても景気の悪いことを嘆

く話ばかりだった。これらの企業は、かつては日本の基幹産業だ花形産業だともてはやされ、本社や工場がある町の消費物価はその社員に決められるときえ言われ、社員も家族も肩で風を切って歩いたものである。

この不景気で次々に中小の企業が倒産しても、大企業は政府や地域の保護で生きながらえるが、こうした恩恵を受けられぬ下請け専門の弱小企業は連日ばたばたと倒産していた。

暦の上では季節はもう春だった。しかし冬の寒さがまだ残っていた。

ときおり春らしい陽は射すのだが、桜の芽はまだ木の肌の下に身を潜めていた。

湿度の高い、はっきりしない天候が続き人間にも憂鬱ゆううつな日が続いていた。

森川の事務所と住まいを兼ねたホテルの窓ガラスの向こうの空も、町の景色も、重苦しく鉛色に煙っていた。景気や気候のせいではないが、電話のベルが鳴る回数もめっきり減っていた。「相談役、いいとか悪いとかは別問題として、昔はこういう世相の時こそ私たちの仕事が忙しくなったのですがねえ」

テレビから目を森川俊にうつし、税所一郎が言った。

「ん、うん……」

森川が肯定とも否定ともつかぬ生返事をした。

「金融業なんて商売をやっていると、つくづく世の中には妙な人間がいるものだな、と柄にもなく考えさせられるときがありますよ。今もそうなんですがね」

インドシルクで仕立てたのであろう、鈍く銀色に光る作務衣姿の森川俊がテレビに向けた目を動かさず、懷から煙草を取り出そうとしていた。

傍らに手元から離れたことのない黒色の印伝の合切袋が無造作に置いてある。

肥り気味だからそうなのか、もともとそうした体型の人に汗っかきが多いのか税所も暑がりだった。テーブルの向こうの森川にはちょっと肌寒いほどの室温なのに、税所は額に汗を滲ませていた。

対照的に森川は筋肉質と言えは聞こえはいいが、肉が少なすぎた。百七十六センチも上背がありながら六十キロぎりぎりの体重なのである。

初めて彼と仕事をする者達は人違いをしたのかと戸惑うのであった。

目の前にいるのは噂に聞く凄腕の森川俊ではなく、代理の者ではないかと目を疑うのだった。森川達に仕事を依頼する者達は、自分が悩まされている事件を暴力団や裁判所に代わっておだやかに解決してくれる集団のリーダーと聞かされてくるのであった。

しかし、時には相手に罵声を浴びせたり、威嚇することも、腕力に対抗しなければならぬこともあろう。配下の荒くれを指揮し意のままに動かす男なら、身に付いた貫禄も体も当然そうであろうと、がっしりした体格と仁王様のような鋭く激しい形相を想像してくるのだった。ところが想像からかけ離れ過ぎているのである。

細い黒縁の眼鏡の奥の目は柔和で、言葉も丁寧であった。決して暴力団風な口のききかたは

しなかった。ただ作務衣姿であることが見慣れぬモノには異様だったかもしれない。

「相談役、ちょっと失礼させていただきます」

森川の前だからと部屋に入ってから暫くは遠慮していたが、税所はたまりかねたように、失礼と断って、背広の襟を後ろにずらしてネクタイを弛め、ポケットから大型のハンカチを取り出し首筋を拭いはじめた。ハンカチは、クリスチャンディオールのものであった。

森川がテレビに向けていた目を動かし、ハンカチをちらと見て、

「税所君、またいつもの口癖と思うかもしれんが、女には金をかけなさいよ。只で安く済ませようなんてケチなことは決してしなさんなよ」

と税所がこの部屋に入ってから初めて会話らしい話をした。

聞きようによっては女性を侮蔑したような内容である。素人であろうと、その方面のプロと同じように金を払ってつき合えという意味であった。

恋愛感情など無視しろ。すべて金で解決できるようにしておいた方が後々の面倒がなくなる、と女性をモノとして捉えているところがあった。

「あ、これですか。この女は大丈夫なんです」

首筋も、額もすべて万遍なく手のハンカチで汗をぬぐい取り税所がおかしそうに笑った。

「少し賑やかすぎると思ってな」

森川が懷から取り出したキャビンキャビンを口にくわえ、ジッポーで火を点けながら言った。

「やはりそうですか。正直、私もあまり似合わないなと思ったのですが、せっかくなれたモノを素っ気なく突き返すわけにもいかず、汗っかきの私にはこれぐらい大きい方が使いやすいので持っているだけです。特別深くなつたわけではありません。払うモノはきちつとしてます。それで上客だと思って呉れたんじゃないですか」

汗を拭い終えたハンカチを宙に浮かせたまま、何処へ持っていこうかと迷っていた。

「そうか、泣かせるだけならいいが、後で自分が馬鹿を見ないようにな」

私達の仕事はヤクザだと思われがちだ。世間に大いばりできない商売だ。いつ命を失うか分からない。幸い殺されなかったとしても腕や足を失うこともある。あるいは再起不能なほどの怪我を負わされるかもしれない。

こちらがいくら正当だと主張しても、相手によっては正論が通らぬ場合もある。腕尽くで物事とおそうとする連中が多いことぐらい、今までの経験から知っているはずだ。

子供が出来たの結婚してくれのとまといつかれ、身動きできぬようになってしまうと仕事に性根が入らなくなる。結婚を前提としない女と寝るときは常に金で解決しておけ。

これが森川の口癖だった。

「心得てます」

税所が大きく頷いた。
うなず

「君も結婚を焦る女達に狙われる年だ。今後とも気を付けることだ。余計なお節介を焼いたが、
ねら

その妙な人間てなんのことかな」

三分の一ほど吸ったところでキャビンを揉み消し、ようやく本題に入った。

「まだ姿が見えたわけではありませんので、もう少し後でご報告をと思っていましたが金額の膨れ方がちょっと早いので、なんか臭いモノが隠れていそうな気がしましてね」

「いつも言うことだが、金の話はどこの誰がどれほど、どのようにと説明しなければ聞く方には何のことか、いっこうに想像できない」

森川の言うとおりであった。税所の話はいつも、どこかで要領を得ず中途半端だった。

いつ、誰が、何処でどのようなという説明が欠けていた。

「申し訳ありません！ 貸し付けてるのは九州の商事会社で資本金は四億少々。まあ大きい方です。それより、その社長の兄がやっている会社が大きいんですわ。業界では九州地区一、二番という大きさです」

手のハンカチの処分をどうしようかと迷っていたが、また首筋の汗を拭いながら答えた。

暑さのせいばかりではない、冷や汗が額に滲んでいた。

日常の暮らしや遊びなら、多少羽目を外しても素知らぬ顔をするが、仕事で要領を得ぬあやふやな態度や言動があると森川は厳しく追及するのであった。

「親会社が大きいかわ小さいかを問題にしているのではない。先方が将来的にも間違いなくきっちと返済してくれるかどうかなのだ。今の君の話には、貸し付けている手形も額面も説明がな

い」

厳しい目で森川が言った。

「はい！ 申し訳ありません。融資金額は今日現在で合計五億ほどです。担保は充分です。内訳は手形割引が約三億、融手らしいのが二億ほどです」

「ん？ 相手は融通手形まで出しているのか？ なぜ融手だと分かる？」

森川が眉をひそめた。

融通手形というのは自分の会社の手形では取引先が受け取ってくれない。あるいは緊急に現金が必要だが手元にない。そのような場合に、自社の手形を誰かに渡し、相手にも同額の手形を発行させ、それを互いに交換して支払いなどに充当させる方法である。

複数の者達が互いに架空の商取引があったようにつくろい、現金決済を先に延ばしたり、その手形を金融機関で割り引いて現金を手に入れることもある。

手元に現金が無くても、とりあえず急場をしのげるため、力のない弱小企業がこの手を使うことが多い。しかし、これで会社の命運を断たれることがあるほど危険な商行為であり、商法で禁じられている。

小切手、為替、約束などの手形を扱ったことのある者なら、いかに危険なものか常識として当然心得ていなければならぬ事である。

危険だから法律で禁じられているのではない。

あたかも取引があったかのように互いに手形を振り出し、それを銀行などの金融機関に割り引かせたりして現金化して使うのである。そのまま裏書きして取引先に支払い決済として渡すこともある。架空の取引で得た有価証券を善意の第三者に有価証券として支払いや手形割引を行わせるのである。

いわば一種の詐欺である。または有価証券の偽造と解釈しても良い。

「紹介者の名前は聞いてくれるな、と言うので調べませんでした。が振り出し地が殆ど同じで、中には銀行が同じ所もあるのです。それで、こいつは怪しいと思ひまして、紹介者なしでは割り引けない。どうしても割り引けというのなら期日なしのものを持ってこいと言ったんです」
「ほう、それで？」

「そうしたら、期日なしではいつ振り込まれるか恐いから出来ないと言うんです。じゃ、こちらは無理だ。それでもと言うのなら表に個人保証をなさいと言ってやったら、二日後に期日なしの約手を持ってきたのです」

「なるほど。簡単に期日なしの手形に換えられるはずがないな。それで、その客は男か」

「はい、親会社が南九州市に本社がある是枝食品と言いますが、彼はその社長の弟で取締役で経理担当専務。販売部門の子会社は枝商事では社長です」

「ふむ……、なんとなく臭うな」

「それで、ま、とりあえず取引が始まったのですが彼が持ってくるのは、さきほど言いました

親会社の手形なので、少しは安心できるのではないかと」

よほど暑いのか、まだ額に汗が浮いていた。それを拭きながら税所が弁解した。

「裏書きはどうなっている」

また、じろりと税所に目をくれて森川が聞いた。

「その是枝商事の裏書きをさせてあります」

「それだけか」

「といいますと？」

「振り出し人の社長の個人保証は」

「あ、申し遅れました。取るようにしてあります。最初は、それほど信用出来ないなら、よそに頼むというものですから、そうなさいと突っ放したんです」

「うむ、それで？」

「そうしたら案の定二、三日して泣きついてきました。面白くないので、金利を〇・一％上げてやりましたよ」

「なるほど。それで、君が言う、その親会社というのは？」

「はい、企業年鑑にも載っていますが九州地区から中国、四国方面にも手を伸ばしていて、あの辺り一帯では結構有名な会社です」

やっとこれで面子が立つと税所が得意げな顔をした。

「食品といつても、一般的な食料品からお菓子やパン、駄菓子の類までいろいろだが……」

森田が煙草の火をテーブル上のガラスの灰皿で揉み消しながら言った。

「ええ、創立当時は地方の製パン業だったようですが、現在はパンは勿論ホテルに納める高級ケーキからチョコレート、それに相談役がおっしゃる一般駄菓子まで手広く扱っています」

「ほう、でテリトリーは九州一円から中国、四国までだと？」

「はい。そうそう、この頃は見かけませんが大相撲の懸賞幟も出していました」

「それだけで規模を測るのは危険だが、ま、ある程度の物差しにはなるだろうと？」

「そのとおりです」

税所が得意げに言った。

優勝に絡みそうな力士の取り組みや最^{ひいき}肩力士の取り組みに土俵の周囲を一周する懸賞幟を提携するのは、税所の言うとおり、観客はある程度の規模をもつ企業だと思って見ている。

しかし、出すからには地域一円で社名を知られていなければ広告の効果はないのである。

「出すだけなら、特に問題のある会社でもない限り、どこでも構わんのじゃないか。相撲の懸賞に金を出して社名入りの幟が土俵の周囲を回っても経営内容がしっかりした企業だという証明にはならんだろう」

森川が税所に揶揄^{やゆ}と皮肉を込めて反論した。わずか数秒から、長くて数分の相撲に懸賞金が出せるほどゆとりがある企業というイメージ作りには役立つであろう。近頃は、あの幟の社名

を映すまいとNHKのカメラは画面を引いてしまおうが、日本でもっとも大きなネットワークを持つテレビ局が全国に放送してくれるのである。

テレビの画面から企業名が読めなくても、音声の方では微かに聞こえ企業の規模をデモンスレーションするのである。税所だけでなく、全国的な営業規模を持つ大きな企業だろうと顧客に思わせるには十分な効果があった。

「そう言われれば、そうですが……。しかし地方の村や町の住民だけを相手に商売してるところじゃ、あんなものは出せませんよ」

税所が苦笑いしながら反論した。

「それくらいのことは誰でも知っている。私が言いたいのは君が素人のような感触で商いをしているのではないか、そんな感じがするからだ。違うか？」

「相談役、ポケットマネーから千円やそらの金を貸すわけではありません。いくら私でもたったそれだけの資料で金貸しをしているわけではありません。それなりに調査を入れ、これならゴーしても良いと判断できる材料があったせいです」

森川に追い込まれまいと懸命になったせいで暑さを忘れていた。

「その答えを聞いたかったのだ。いつものことだが、わしら農等の商売は昔の暴力団とは違う。私を除いて君たちはそれぞれ、籍を置いていた組で幹部バッジを付けていた。それまでになるためにはずいぶんと手荒いこともやったはずだ。しかし桜田門もいつまでも見逃してはくれん。暴